

## I-7 江戸時代の金瘡治療における「血」の概念の展開 — 紅毛流外科と気血水論

遠藤 次郎・中村 輝子

日本漢方における最も代表的な医説に江戸時代中期、吉益南涯が提唱した気・血・水論がある。この医説にみられる気・血・水は生理的に循環する気や体液ではなく、血毒（瘀血）・水毒といった病的な体液を意味することが多い。このことは、直接的には南涯の父、吉益東洞の万毒一毒説の影響によるものであるが、その基源を遡ると、戦国時代以来の金瘡治療や南蛮流・紅毛流の医説からの影響を推定し得る。本発表では、ことに「血」についての検討を行いたい。

数多くの金瘡書に共通した特徴として、病理・生理に関する記述の極めて少ない点が挙げられる。戦いという切迫した状況の中では、理論より實際が先行することに

由来するためと思われるが、それ以上に、解剖学や外科学の弱い中国伝統医学の理論が役立たないことが大きな要因であろう。中国伝統医学では「血」は「衛気・営血」といった経絡論の中で統括され、実際に見られる血管を流れる血液のイメージは乏しい。江戸時代、蘭方書の解剖図を見て、漢方の解剖学の貧困さに驚愕し、腑分けが行われたと言われる。金瘡治療を行なっていた人々は、それ以前から、この問題に直面していたことが容易に推測される。

金瘡医が扱った「血」の用例を見ると、血止め、血縛り、血逆、駆瘀血、など、もっぱら非生理的状态にある血液を対照としている。これらの中で、本発表では、「血の道」症に注目したい。今日では「産褥時・月経時・更年期などの婦人に見られる頭痛・逆上・温熱感、寒冷感、発汗などの症状」を意味するが、本報告での「血の道」は婦人病に関するものではない。その用例を見ると、「(手負イシテ)物ニ狂ハ血道ノ故也」(『古今枢要集』)、「痛手負ヌル人ハ血道タカヒテ、ヒタソリニソルトアリ」(『金瘡療治鈔』)とある。このことから、

「血の道」とは、手負いによる出血のショックにより、正規の通路でない新しい「血の道」を作りながら血が逆上する症状を意味していることがわかる。金瘡医は産科も兼ねていたこともあり、金瘡治療における「血の道」は、平和な時代になるにつれ、婦人科の専門用語として残されたと見られる。

金瘡治療における「血」の病の処方には、白朝散、太白散などのように、四物湯（当帰、芍薬、川芎、地黄）が基本処方であることが多い。本処方、今日では、中国でも日本でも婦人科の基本処方として著名であるが、原典は中国唐代の外科書『仙授理傷統断方』であり、駆瘀血剤として用いられている。日中両国で四物湯が外科領域の駆瘀血剤から婦人科の処方へと展開している点は興味深い。このことから、金瘡治療で扱っている「血」が外傷、打撲、出産、月経などに伴う実体を持った「血」を対照としており、「衛気・営血」といった観念的なものでないことが理解される。

一方、江戸前期に導入された南蛮流・紅毛流医学の外科治療を見ると、その基盤となる医学理論は四体液論で

あり、「夫人間之五体ニウモルト云血ノ名四ツ有」のように、当時は四体液は血液の種類（分画）として理解されていた。このような南蛮・紅毛流の、実体のある四体液は金瘡治療の「血」の治療の要望に合致し、積極的に受容されたことを追跡することができる。

吉益南涯の気血水医学が金瘡治療の影響を受けたという報告はこれまででないが、館野正美氏の報告にあるように、父親の東洞が金瘡医と深いかかわりがあることを考え合わせると、南涯の気血水医学も金瘡治療とつながっていたことが想定される。演者らは日本漢方の古方派の成立の基盤に室町時代以降の金瘡治療の影響があると考えているが、本研究の結果もその一例と言える。

本研究は本学卒研究生、石川幸乃さんの協力を得、科学研究費補助金特定領域研究（一）、課題番号一四〇二三一〇四の一環で行った。

（東京理科大学薬学部薬用植物・漢方研究室）